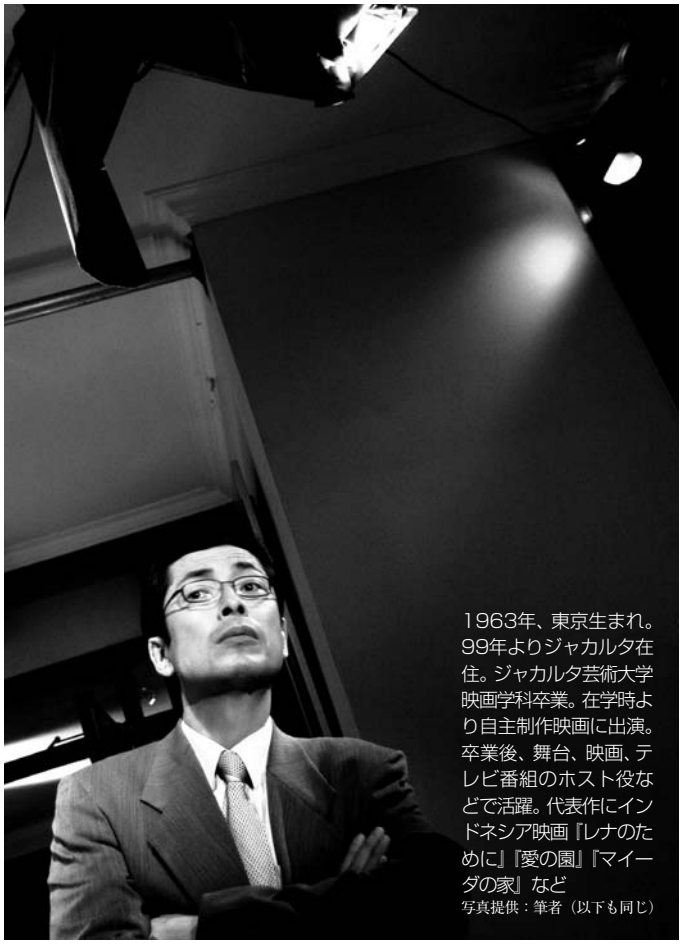
インドネシア

鈴木伸幸

［すずき のぶゆき］俳優

インドネシアで俳優になった。客席の息をのむ緊張感



1963年、東京生まれ。99年よりジャカルタ在住。ジャカルタ芸術大学映画学科卒業。在学時より自主制作映画に出演。卒業後、舞台、映画、テレビ番組のホスト役などで活躍。代表作にインドネシア映画『レナのために』『愛の園』『マイーダの家』など

写真提供：筆者（以下も同じ）

人生の後戻り。いっそのこと、後ろの崖っぷちから飛び込もう

大学を中退後、劇団、デザイン事務所、シナリオライター見習い、放送作家などの活動に取りかかるも、生来の横着で傲慢な性格のため、いずれも長続きせず、30歳の青春の峠を兄の病死で迎えた。

俳優になりたい自称俳優はその後、仕切り直しの居場所を求めて、海外を彷徨する。その旅の終わりに、画家であった兄の手帳に遺っていた旅日記をたどり、バリ島に始まるインドネシア各地を半年にわたって歩き回った。

伝統芸能と呼ばれていた公演を探した。そこに集まる熱い観客を見た。知り合った人たちと話した。家に招かれ、その日暮らしの生活に追われている人たちのなかで立ち往生した。不安な気持ちに取り憑かれて道を急いでいたら、茶を飲んで行けと呼び止められた。他人に対する関心の高さに気づいた。血を流した見知らぬ急病人を抱き起こす人を目撃した。それが他人に対する思いやりだと確信できた。村祭りに参加して舞台に立った。みんなが笑ってくれた。そのとき、彼らと自分の間に心底、引力を感じた。

観察すべきことの多さに驚き、それ以上に一人の自分自身が、一人の日本人として観察されている環境に責任と緊張を感じた。今までは人生の後戻りを続けていた。いっそのこと逃げ場所を求めて、後ろの崖っぷちから飛び込もう。気づいたらいつか時代の一番先端にいて、そしてしっかりとそこに立っていたいと願って。

地方の観客には日本にはないハングリーな波動がある

あれから10年が過ぎた。「『インドネシアで芸能人になる』。初めて会ったとき、お前はそう言ってたんだぜ」。現地の大学時代の友人が今でも感心気に話す。ジャカルタにある芸術大学を7年がかりで卒業した私は、母校の先輩たちが制作する舞台、テレビ、映画等に口コミで出演、知る人ぞ知る有名人になった。

「食えない」日々が相変わらず続いている。なぜなら、活動の大部分を演劇世界で過ごしているから

2009年5月のジャカルタでの公演、スラマット・ラハルジョ演出『千一夜物語』の舞台

である。ここに芝居だけで「食える」プロフェッショナルはいない。広告・映像業界などとコネクトして初めてそれは可能になる。「ゴールデンタイムのテレビドラマに、1年間のレギュラー出演！」、そうなったら私も早速、新車を買おうと思っている。「たらふく食えない」プロたち、そして一攫千金を狙う駆け出しの俳優たちは大勢いる。そんな彼らとの舞台づくりは楽しい。自信満々の彼らは空腹にもめげず、自分ができることを〝今〟、楽しんでいるからだ。

今年は半年間で4作品、舞台に立つ機会に恵まれた。ここは地方の観客がいい。開演直後の客席の息をのむ緊張感……。それを舞台袖で、こめかみのあたりに直に感じることができる。日本では感じ得ないハングリーな波動である。そんな彼らの前で、自由になれれば、何でもできれば、それが役者冥利に尽きる最高の醍醐味である。

友人たちとよく短編映画をつくる。ビデオ撮影主体の三ナイ・インディーズ（金ナイ、照明ナイ、気にしナイ）である。作品のなかには海外の映画祭から招待を受けたものもある。仲間には、いつの間にかこの国を代表するトップカメラマンになった天才もいる。結果はともあれ、この自主制作映画の乗りがいい。インドネシアの映画づくりには欠かせない手づくりの感触。

去年の夏、劇場映画を日本で撮影した。スタッフは監督（兼カメラマン）と俳優（兼助手）の私のたったの二人だ。電車内のシーンでは大胆にも無許可撮影を敢行。バッグからおもむろに取り出した中型カメラを高々と掲げ、堂々と撮影する監督。空気が変わった電車のなかで、カメラを向けられた私は窓の外を見ながら、ただ息をひそめて知らない人の振りをしていた。

気の合う仲間との稽古風景

アルバイトの高校日本語教師。生徒たちにパワーをもらう

番組で〝ぎこちなく、どこへともなく急いでいる〟、そんなイメージの日本人役を与えられることがある。普段はすましているその外国人がバナナの皮に滑って転ぶのである。そして観客は笑う……。そんなときは、悲しいくらい思いっきり転びたいと思う。それが、コメディだからである。「さっきのよかったぞ」。そう言ってくれる仲間がいてくれれば、尻の青あざもご愛嬌である。

アルバイトをしている。ジャカルタ郊外の高校で日本語を教えている。その道の専門的なスキルもないのにである。田んぼの真ん中の出来立ての校舎。校庭を横切るアヒルの群れ。興味津々の笑顔、乗りのいい元気な生徒たちを前に、ただただ即興のステージに上がったつもりで、どうにかやっている。

休み時間の教室で、教科書の端っこに落書きをしている男子生徒がいた。そのうねった波のような、渦巻きのような迫力のある幾何学模様を見たとき、そこには小さな天才がいて、大きな才能があった。そんな彼らに励まされながら、いつか、彼らのなかの一滴の揮発油になりたい。そして、一緒に頑張りたい。

授業が終わった午後には、その日のお手当と、ビニール袋一杯のアヒルの卵がもらえるのである。